

## 大和国侍之事

一、添下郡筒井順慶老、先祖近衛殿末葉之由申伝也、祖父を順政と申、親父を順興と云、元来南都衆徒之家と云伝ふ、順慶器量の人にて武威を振ひ國中過半討随へて、筒井に平城を築き居城す、自分之領知六万石程といへとも類葉広き人なり、応仁年中より数度大和の大乱に及といへとも、自分所々にて高名いたし、終強剛にして和談す、然る所に松永弾正少弼久秀、筒井を手に入へき覚悟にて人数を払て法隆寺まで打出候を、順慶も筒井より廿町はかり西、梅檀木村と申所まで出向て、順慶之先手ハ島左近・松倉右近兩人に国侍等随て並松と云所に備、互に掛向ひ軍初り松永久秀之先手敗北す、順慶先手の軍兵とも追討にしてけり、余り長追し法隆寺之寺内に松永人数を隠し置候故、此伏兵とも筒井人数之跡を横切しかは、皆敗軍せり、筒井勢無左右城へ入事不成して、直に東山中宇多郡へ落てげり、其頃宇多の城には秋山と申仁被居候、これも順慶の由緒の人にて彼城に居ス、本領へ可<sub>レ</sub>帰計策止時なし、松永久秀も宇多へ人数を差向一戦に及へきと智謀をめくらし候得とも、いまた大和ノ国侍も皆々随ひ不<sub>レ</sub>附、其上高取之城に遠知、十市の城には常陸介、順慶の味方人なり、此両城ハ道細く險き山にて、宇多には番坂と申切通し入口に有之、無左右責入へき事も不及して、南都東大寺の少し北に当て小高き山あり、此所を築き南には谷川を要害にし多聞<sub>門</sub>作りに城を取立、大和一遍に平を可<sub>レ</sub>入<sub>(ママ)</sub>覚悟相見候得とも、国侍衆過半不<sub>二</sub>附<sub>一</sub>随<sub>一</sub>也、然所に順慶辰ノ市城主井戸